

やまがた再発見

534. 佐藤十弥 ㊦

エッセイスト 高橋 まゆみ

「木」に始まる。仲間とともに創刊した文芸誌は、上質の紙を用い、著名な文筆家の寄稿をも掲載する評価の高い冊子だった。この「骨の木」から十弥と一緒に出版に携わったのが、小松写真印刷(コマツ・コーポレーション)の活版職人、高橋秀雄であった。どんな難題にも納得がいくまで応えた職人気質の仕事と、採算を度外視した小松写真印刷の助力とがなければ、なし得なかったものであった。十弥は職人が持つひたむきに敬意を抱いていた。「私がこの世でいちばん尊敬するのは、名もなく栄誉も求めず、ひたすらに仕事に打ち込む職人である」

単行本に匹敵

膨大な仕事の中で特筆すべきは、「みちのく豆本」であろう。十弥と共に酒田の「三佐藤」のひとりに数えられた佐藤十弥が版元となった「みちのく豆本」で、十弥



十弥が装幀、デザインなどを手掛けた豆本は108冊に上る
＝酒田市、コマツ・コーポレーション

「みちのく豆本」の頒布は会員制で、当初は100部限定で年数回ほどの出版であった。著者は庄内地方の出身者が在住者に限定する形でスタート。小松写真印刷の冊子に載せられていた公太郎の言によれば「豆本が延々30年以上も続いたのは、装幀を引受けて殆ど全冊を手がけ、形は小さいが堂々単行本に匹敵する出来栄を示した十弥さんに負うところは絶大である。十弥さん無くして豆本は無かつた」と云っている。馬燈「まで豆本100冊、別冊8冊と、図らずも108」の手仕事となった。豆本に付される前回刊行物への読者の反応をまとめた「たより」に、豆本の包装紙、会員に宛てた発送用封筒のデザインまで、十弥は豆本の支柱であった。公太郎は、十弥の急進に触れ「正に突然自生した」と、豆本の幕引きを本気で考えたという。あらためて豆本を手にとると、酒田との関わりが深い「夢二と酒田(山岸龍太郎)」は、

舞台美術と、変幻自在な作風で酒田の街に新風を吹き込んだ。彼の発想は果てることなく、つぎることがない。さまざまな分野で活動できた背景には、感性を磨き研ぎ澄ましてきた不断の努力があり、十弥自身が乗り越えてきた多くの葛藤があったに違いない。広告のデザインや音楽家・加藤千恵門下による市民オペラ「ミカド」「フィガロの結婚」の舞台装置などは、十弥節を余すことなく発揮する総合プロデューサーともなりえた。

変幻自在な作風、街に新風

は57(昭和32)年から急逝する80(同55)年まで100冊以上もの装幀を担っている。公太郎は「酒田市の下巻を纏めにかかっている昨今(略)貴重な統計を散逸させるには忍びぬ(略)これを保存する方法が無いものかと思つたのが動機である」(「豆本二十七年」と刊行を思い立った。

十弥は絵で才覚を現し、書にも独特な趣があった。豆本を飾る表紙の絵とタイトルは十弥の手によるもので「書名などの書が、仕画と渾然一体を成している(絵と詩)」。製本は豆本発祥の例に倣って、当初は紐綴であったが、66(昭和41)年以降は背角が主流となった。第一冊「河村瑞賢者」から第84冊「柳集」走

5色刷の背景に竹久夢二の絵が表紙。「遠い日」(加藤千恵)には大正の叙情が漂う。化粧裁ちをせず、アンカット製本で、ペーパーナイフでページを切り開く仮フランス装の「鈴木泰助歌集 おこは、何とも洒落た試みである。吉野弘詩集「虹の足」も出色といえよう。

十弥は、類まれな才能という「鍵」で、商業美術、装幀、

藤千恵という音楽家と、佐藤十弥という舞台演出にも秀でたプロデューサーがいたことで実現した奇跡のコラボであった。

往時の十弥について、地元の菓子店「小松屋」の小松久雄さんは回想している。「十弥さんという方は絵に文章、印刷、演出、釣、マジシャン等々何でもござれであったが、金銭的にはこだわりのない方だったので私達にとっては(かけがえのない)方だった。たとえばチラシ一つ出すにしても、こんなことをPRしたいのだ、と言っただけでデザインと文章が出来て来るし、印刷屋さんを呼んで活字の字体大きさを指定して呉れた」(「山花里」)

酒田での文芸関係の仕事は、35(同10)年から43(同18)年まで発刊された「骨の

は7(昭和32)年から急逝する80(同55)年まで100冊以上もの装幀を担っている。公太郎は「酒田市の下巻を纏めにかかっている昨今(略)貴重な統計を散逸させるには忍びぬ(略)これを保存する方法が無いものかと思つたのが動機である」(「豆本二十七年」と刊行を思い立った。

十弥は、類まれな才能という「鍵」で、商業美術、装幀、

藤千恵という音楽家と、佐藤十弥という舞台演出にも秀でたプロデューサーがいたことで実現した奇跡のコラボであった。

往時の十弥について、地元

「緑館」の第三号に「履歴書」と題した一節がある。「中秋の名月に近く、十八歳の女性の誘惑に負け、突如視界に深い霧が降り、甲虫と女の肌への誤差に想いわずらう身となった」18歳の女性は、「不適にも女は飛行士を志していた」のである。庄内地方出身者で初の女性飛行士となった佐藤勝代と推測される。勝代は1906(明治39)年飽海郡上田村(現酒田市)の宮大工・本登重太郎の三女として生まれた。群馬県前橋の第一航空学校から日本飛行学校へと進み、女性飛行士となった。その折「美人で体豊満、健康無類」と新聞で紹介された話題となった。ふと垣間見た十弥の初恋かもしれない相手は、一つ年上の勝代だったのではないだろうか。十弥17歳の秋のことである。



佐藤十弥の自画像。絵と書に独特の趣が漂う
＝「絵と詩」より

膨大な仕事の中で特筆すべきは、「みちのく豆本」であろう。100冊以上もの装幀を担っている。

「母が勝手に引き受けてしまつた」ことに閉口した話している。十弥は壮年のころ、「面会謝絶」という札を玄関にかけたという。彼なりに仕事の

【おまけ】「白付」やまがた再発見「で「田中倉子」は田中蒼子と、用語の「重奏低音」は「通奏低音」の誤りでした。おわびして訂正します。

職人に敬意を抱いていた十弥。コマツ・コーポレーション所蔵の扁額に、一端がうかがえる
＝酒田市

金銭に無執着

一貫していえることは、十弥は金銭に執着しない性格であった。自分の仕事の価値に見合った価格を設定しない。それが流儀であった。報酬額を問われると「いいんだ(いいです)」と応えた。そのため、十弥の妻は、住宅の一角を店舗として貸し出し、家計の一部とした。年末には、玄關先に箱を置き「支払いの方はお取りください」と書き添えたという。

戦後の復興と高度経済成長を背景に、十弥の活動は精力的だった。酒田市・中町の商店街の五店会「ぶぐる横」の宣伝部を担当し、にぎわいの創出に力を注いだ。同じころ、映画評論家の淀川長治が「世界一の映画館」と評した、佐藤久一が支配人の「グリーンハウス」の好意で詩とエッセイのノート「緑館」が発行されている。その中に、断片的ではあるが、十弥の秘め事がつづられている。

「緑館」の第三号に「履歴書」と題した一節がある。「中秋の名月に近く、十八歳の女性の誘惑に負け、突如視界に深い霧が降り、甲虫と女の肌への誤差に想いわずらう身となった」18歳の女性は、「不適にも女は飛行士を志していた」のである。庄内地方出身者で初の女性飛行士となった佐藤勝代と推測される。勝代は1906(明治39)年飽海郡上田村(現酒田市)の宮大工・本登重太郎の三女として生まれた。群馬県前橋の第一航空学校から日本飛行学校へと進み、女性飛行士となった。その折「美人で体豊満、健康無類」と新聞で紹介された話題となった。ふと垣間見た十弥の初恋かもしれない相手は、一つ年上の勝代だったのではないだろうか。十弥17歳の秋のことである。